2 月 20 日のメッセージ

聖書：マルコによる福音書　2：　1－12

「その人たちの信仰を見て」

たとえ毎日、神の言葉を聞いていても、私たちには避けることができない事柄がたくさんあります。願い通りにならないことは山ほどあります。予想も付かない突発的な出来事に悩まされることも日常茶飯事です。

中でも、私たちの避けられない最大のことは「死」でしょう。どれほど長生きしたとしても、私たちの人生には必ず終わりがあります。そして、その終わりまでの間、私たちを悩ませるのが「病」です。一過性のものもあれば、一生付き合っていかなければならないものもあります。軽重もあります。加齢と共に危険も、確率も上がっていきます。不安と隣り合わせの毎日が続きます。

そこに、救いを求める心が生まれてきます。できれば一日も早く癒されたいと願うのはある意味、当然のことと言えるでしょう。

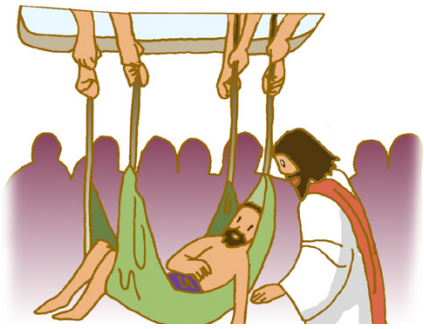
そのような私たちに示される一条の光、それが聖書に記される癒しの奇跡です。「そうなってくれたら良いのに」と願わない人はいないでしょう。しかし、イエスの癒しは文字通り奇跡的に起こります。だとすれば、自分とはまず縁がなさそうです。

ところが、イエスの癒しをよくよく見てみると、イエスは「その人たちの信仰を見て」(「イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、『子よ、あなたの罪は赦される』と言われた。」マルコによる福音書 2:5)、罪の赦しを宣言されています。直接的な病の癒しではなく、病によって阻害されている神との関係が修復されるのです。

また、病の中にある者は、神との関係ばかりでなく、隣人との関係も阻害されていることが多いものです。その修復は自分の努力だけでなし得るものではありません。共に生きる全ての友が、祈り願う中で起こされる奇跡なのです。

預言者エリシャは、シュネムの婦人の息子が死んだとき、その子と共に神に祈りました(「彼は中に入って戸を閉じ、二人だけになって主に祈った。」列王記下 4:33)。大切なのは「神に祈った」ところです。「誰が」でもなければ、「救われるべき限定された命が」でもありません。周囲の者がその相手のことを思いながら真剣に「神に祈る」ことが大切です。また、初代教会でも同様に、互いのために祈っていました(「信仰に基づく祈りは、病人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます。その人が罪を犯したのであれば、主が赦してくださいます。」ヤコブの手紙 5:15)。

ただし、祈れば必ず実現するわけではありません。もちろん、そうであってほしいとは思いますが、それは人間の傲慢でしょう。

「主が望まれるのは主を畏れる人」(「主が望まれるのは主を畏れる人／主の慈しみを待ち望む人。」詩編 147:11)です。だから、何よりもまず「相手のために祈る」ことが大切です(「だから、主にいやしていただくために、罪を告白し合い、互いのために祈りなさい。」ヤコブの手紙 5:16)。見返りを求めてではなく、まず相手のために祈る。その時、「その人(たち)の信仰を見て」、何かが起こるかもしれませんし、起こらないかもしれません。けれども、その祈りを通して確実に、「その人と神との関係は修復されている」はずです。そして、祈る人と祈られている人との関係も。

主を畏れつつ謙虚に、相手のために祈る私でありたい。心からそう願います。